

| 分類 | No. | 発言内容 | 意見のポイント | 論点の整理 | |
|----|-----|--|--|--|---|
| | | | | 白田川 | 稲取大川 |
| 治水 | 1 | ●市街地の下流部でも、河床勾配は1/40と急峻であり、施設の老朽化も見受けられる。侵食による被害が想定されるため、適切な維持管理が必要であるととともに、施設能力以上の出水で被害拡大を抑えるためにも、施設の粘り強さも重要である。 | ◆河川が急勾配であり、流域からの土砂供給が多いことから、治水機能を十分に発揮できるよう、適切な維持管理や河道断面の確保維持が必要 | 白田川は、全区間にわたって急勾配で流下する2級河川である。下流部では、国道135号や伊豆急行線など伊豆半島東岸の重要基幹交通網が横断しており、災害時等における交通の遮断は地域経済への影響が大きい。 | 稲取大川の河口部には、「稲取キンメ」として一本釣り水揚げ量県内一を誇る稲取漁港がある。また、下流部では、伊豆急行線や国道135号の重要な路線が横断し、流域内には東伊豆町役場があるなど町の中心地として人口や資産が集まる地域となっており、災害時等における交通の遮断は地域経済への影響が大きい。 |
| | 2 | ●白田川流域も含む伊豆半島自体、根本的には軟弱な地盤であるため、施設をつくって終わりではなく、経過観察をするべきである。 | | ①昭和33年狩野川台風による災害を契機に河川施設が砂防事業により整備され、支溪流には砂防堰堤が設置された。そのため、 <u>現況河道は概ね年超過確率1/30の降雨に対応した流下能力を有しており、近年、流域内の浸水被害は報告されていない。このため、抜本的な改修は必要としない。</u> | ①昭和33年の狩野川台風や昭和50年、51年の豪雨による浸水被害や河川施設被害を受け、災害を契機に河川整備が行われてきたため、 <u>現況河道は概ね年超過確率1/30の降雨に対応した流下能力を有しており、近年流域内の浸水被害は報告されていない。このため、抜本的な改修は必要としないが、一部の流下能力不足箇所については、河床掘削等により断面を確保する。</u> |
| | 3 | ●基本方針として、年超過確率1/30を安全に流すことを計画目標とするも、最近では想定以上の降雨が頻発化しており、ハード対策だけでは、対応に限界があるため、水害リスクを踏まえて、避難対策や住まい方を工夫することが重要である。 | ◆施設能力を超える洪水に対しては、ハード対策だけでは限界があるため、水害リスクを踏まえた避難対策や住まい方の工夫など、ソフト対策の充実が必要 | ②白田川では、急勾配による侵食、土砂供給による河道の閉塞や施設の老朽化が懸念されていることから、治水機能を十分に発揮できるよう、 <u>適切な維持管理や河道断面の確保が必要である。</u> | ②、稲取大川では、急勾配による侵食が考えられることから、治水機能を十分に発揮できるよう、 <u>適切な維持管理や断面確保が必要である。</u> |
| | 4 | ●「流域治水」というのも非常に重要なポイントであるが、「なぜ下流の人たちのために上流の人が何かしなきゃいけないのか」というのが、やはりどうしてもある。このため、流域治水に取り組む上では、 <u>上-下流間での合意形成が図れるよう、普段から、どうやって上流のことを下流の人に知っていただくのか、下流のことを上流の人に知っていただくのか</u> ということを考える必要がある。 | ◆県、市町、住民など流域のあらゆる関係者が治水に対する共通認識を図り、防災・減災対策に連携して取り組むことが必要 | ③気候変動の影響等による想定を超える洪水や、施設能力以上の洪水が発生し氾濫した場合でも、できる限り被害を軽減するため、「自らの命は自ら守る。自らの地域はみんなで守る」とする <u>東伊豆町の防災対策と連携するなど、流域のあらゆる関係者と協働して、ハードとソフトが一体となった防災・減災対策に取り組むことが重要である。</u> | ③気候変動の影響等による想定を超える洪水や、施設能力以上の洪水が発生し氾濫した場合でも、できる限り被害を軽減するため、「自らの命は自ら守る。自らの地域はみんなで守る」とする <u>東伊豆町の防災対策と連携するなど、流域のあらゆる関係者と協働して、ハードとソフトが一体となった防災・減災対策に取り組むことが重要である。</u> |
| | 5 | ●防災上のリスクについて、地域住民と行政との共通認識が図れるよう考慮すること。 | | ④静岡県第4次地震被害想定により、白田川は施設計画上の津波高さ（L1）の津波では <u>河川内を遡上することによる被害は想定されていない。</u> 最大クラスの津波（L2）には、 <u>東伊豆町の津波防災地域づくり等と連携した対応を図っていく必要がある。</u> | ④静岡県第4次地震被害想定により、稲取大川では <u>施設計画上の津波高さ（L1）の津波が河川内を約0.2km遡上すると想定されている。</u> 、稲取地区では、 <u>地元との協議を受け、観光や景観への配慮から、当面は避難を中心としたソフト対策を推進する方針が示されている。</u> 最大クラスの津波（L2）対策も含め、東伊豆町の津波防災地域づくり等と連携した対応を図っていく必要がある。 |
| | 6 | ●近年、激化する災害は、河川整備だけでは抑えきれなくなっているため、河川部局だけでなく他の課との連携を図らなければならない。 | | | |
| | 7 | ●白田川流域を含む東伊豆町は、三筋山に既に幾つか存在しているなど、風力発電の適地であり、風力発電所あるいは太陽光発電所が山林を開伐して設置されるということが想定される。 <u>流域治水及び景観の観点から、今後こういう流域の考え方は、山林の開発行為がどうなっているかというのも含めて、報告、調査をしていくことを盛込むほうが良い</u> と考えられる。 | | | |
| 利水 | 1 | ●天城山系は特定植物群落の指定が多いのが特徴である。その中のブナの原生林は水源かん養としての役割を担っている。白田川において、 <u>上流域に生育している特定植物群落を記載してもらいたい。</u> | ◆水源かん養としての役割を担う特定植物群落に裁定されているブナの原生林に着目することが必要 | ①天城山の多雨な気候特性によりブナの原生林が分布していることによる豊富な河川水を昭和初期から東伊豆町の上水道の水源や発電に利用しており、 <u>住民生活や観光・経済活動に欠かせないため、水源かん養として役割を担うブナの原生林のを考慮しつつ、現状の豊かな流れを今後も維持・保全していく必要がある。</u> | ①稲取大川には、水利使用に関わる河川法の許可はなく、農業用水等の慣行水利もないが、昭和30年代以降、ゴルフ場やレクリエーション施設などの開発が行われ、地域の重要な観光資源となっていることから、今後も開発状況に注視しながら、 <u>土地の適正利用、森林の保全、生活排水の適正処理について東伊豆町などの関係機関や地域住民等と連携しながら、河川及び流水の適正な管理に努める。</u> |

| 分類 | No. | 発言内容 | 意見のポイント | 論点の整理 | |
|---------|-----|---|---|--|---|
| | | | | 白田川 | 稲取大川 |
| 環境 | 1 | ●白田川で確認されているアユカケは、海から川へと遡上する回遊性の魚類であるが、遡上能力が非常に低いため、海と川の連続性を確保するよう配慮する必要がある。 | ◆海と川につながり、連続性に配慮することが必要 | <p>①河口から下流部では、海と川を回遊する絶滅危惧種（環境省：絶滅危惧Ⅱ類）のアユカケ（カマキリ）が確認されており、遡上能力のあるアマゴが上下流で確認されていることから、<u>海と河川につながりや上下流の連続性に配慮する必要がある。</u></p> <p>②上流部では、ケヤキ群落やムクノキエノキ群落などの落葉広葉樹で形成された溪畔林を有しており、冷水を好むアマゴなどの良好な生育環境となっていることから、<u>広葉樹の溪畔林が育む水辺環境に注目する必要がある。</u></p> <p>③河口部の国道135号の白田橋や伊豆急行線の車窓から、<u>白田川を中心とした街並みや海岸を一望できる景観は、住む人、訪れる人の目を楽しませており、魅力のある川として後世に継承していく必要がある。</u></p> | <p>①コンクリート護岸や護床工が整備されているが、河口部はニホンウナギやハゼ類といった礫床を好む魚種が確認されており、<u>礫床を保全する必要がある。</u></p> <p>②上流部には良質な溪畔林により、重要種であるオカダトカゲが確認されていることから、<u>河川の背後地との連続性を確保する必要がある。</u></p> <p>③金目鯛の一本釣りの水揚げ量が県内一を誇る稲取漁港が位置する河口部周辺では、<u>古くから漁業により形成された伊豆半島らしい景観が残されていることから、こうした周辺の景観に考慮した川づくりが必要である。</u></p> |
| | 2 | ●森林と河川、そして海の関係というのは非常に深いものであり、森林が復活し、川がきれいに流れるようになることで生物多様性が川や海に生まれてくるという一連の流れがある。この事を考慮して河川計画を立ててほしい。 | | | |
| | 3 | ●上流部の溪畔林（広葉樹）が水面に日陰を形成することで、流水の水温上昇を防ぎ、冷水を好むアユやアマゴなどの良好な生息環境を形成していると考えられる。貴重な自然環境として保全すべきである。 | ◆上流部における広葉樹の河畔林が育む水辺環境に注目することが必要 | | |
| | 4 | ●白田川の上流部は流量も豊富であり、「昔からの日本の川らしい」自然河岸であるなど、大いに自然を感じる河川であるといえる。このような河川景観は現在では貴重であり、また、観光資源としても有用である。 | ◆観光資源としての価値も有する上流部の良好な手の加えられていない自然環境は、貴重であるため、周辺の景観に考慮した川づくりを考えることが必要 | | |
| | 5 | ●観光業（飲食・宿泊業）の比率が多いためという流域の現況も踏まえ、整備基本方針・河川整備計画の河川環境の中に、景観的な項目を重視して入れてほしい。 | | | |
| | 6 | ●第5次東伊豆総合計画との連携を方針の中にも入れており、「自然環境の保全と有効活用」の中で景観整備を挙げられている。これに関して、「自然環境」の中に書いている「景観整備を推進します」というのは、どのような形で捉えられているのか。 | | | |
| | 7 | ●「川と共に生きていく」というものが分かりやすく提示してあげることも1つの景観である。日常的に河川に目を向けるような景観の整備。美しいというよりは、 <u>河川に目が行くような形で整備をしていく</u> というのも1つの「景観整備」の形である。 | | | |
| | 8 | ●白田川流域を含む東伊豆町は、三筋山に既に幾つか存在しているなど、風力発電の適地であり、風力発電所あるいは太陽光発電所が山林を開伐して設置されるということが想定される。一方で、観光として栄えている地域であるため、施設整備等を行う際には、景観等への影響も考慮が必要である。 | | | |
| 住民との関わり | 1 | ●流域内の住民の生業はどのようなものであったか。河川との関わりはあったのか。 | ◆歴史や人との関わりを踏まえた川づくりを考えることが必要 | <p>①かつて江戸時代では、上流部で行われた硫黄採掘により、下流部の農作物や河口部の海産物に甚大な被害を被ったと記録されており、昭和初期から水道用水や発電に河川水が利用されるなど、古くから人と川の間わりがあったことを踏まえ、<u>地域住民が河川を財産と捉えて、川の様々な姿に関心を寄せることが求められることから、河川に対する関心を高める取組を行う必要がある。</u></p> <p>②下流部では親水公園や親水護岸の整備を行っているほか、上下流でアマゴやウナギなどの放流を行っている。また、アンケート結果から、半数以上の方が白田川で水遊びや川遊びを行ったことがあると回答しており、川に親しみやすい空間となっていることから、<u>親水施設の整備や適切な維持管理により、水辺に近づきやすい環境づくりに努め、魅力のある地域づくりにつなげる。</u></p> | <p>①現状では、目立った河川利用は確認できないが、稲取地区の中心地である下流域では、<u>河川が住宅に近く、生活空間と密接しており、住民が河川の様々な姿に関心を寄せることが求められる。</u></p> |
| | 2 | ●流域内に訪れる観光客に対して、どういった対策をしていく必要があるか、明記すべき。 | | | |
| | 3 | ●両流域には、遺跡など多くの指定文化財を有しており、文化が多く生まれた地域であると考えられる。 | | | |
| | 4 | ●流域の産業の傾向として、第一次産業に従事者が減少し、ジオパークを始めとした観光に代表される第三次産業の従事者が増えているということが表されている。一方、コロナの影響によって人々の動向が変わり、これに従って産業形態や河川との関わり方に変化が生じることが想定されるが、どのような対策が行われているか。 | | | |